

「アンチヴァイラル」★★★★

2 0 1 3（平成 2 5）年 6 月 9 日鑑賞
 <テアトル梅田>

監督：ブランドン・クローネンバーグ
 シド・マーチ（ルーカス・クリニックの注射担当の若手技師）／ケイレブ・ランドリー・ジョーンズ
 ハンナ・ガイスト（セレブな有名女優）／サラ・ガドン
 アベンドロス医師（ハンナの主治医）／マルコム・マクダウェル
 エドワード・ボリス（ルーカス・クリニックの若い男性顧客）／ダグラス・スミス
 ミラ・テッサー（テッサー社の女社長）／ウエンディ・クルーソン
 デヴ・ハーヴェイ（ハンナのマネージャー）／シーラ・マッカーシー
 ドリアン・ルーカス（ルーカス・クリニックの社長）／ニコラス・キャンベル
 デレク（シドの同僚の注射技師）／レイド・モーガン
 レビン（アングラ風俗店の経営者）／ジェイムズ・ケイド
 2 0 1 2 年・カナダ、アメリカ映画・1 0 8 分
 配給／カルチュア・パブリッシャーズ、東京テアトル

＜テーマは「感染」。そんな父親のテーマが息子にも・・・＞

デイヴィッド・クローネンバーグは、カナダの映画監督として有名だ。しかし、私にとっては彼が監督した『イースタン・プロミス』（0 7 年）は面白かった（『シネマルーム 1 9 』1 9 9 頁参照）が、『コズモボリス』（1 2 年）は最悪で星 2 つだった（『シネマルーム 3 0 』未掲載）。そんな彼の長男であるブランドン・クローネンバーグが監督としてデビューした最初の長編作が本作で、本作は 2 0 1 2 年カンヌ国際映画祭のある視点部門に出品され、多くの話題をさらったらしい。もともとクローネンバーグファミリーは映画一家で、ブランドンの姉たちや妹も映画関係の仕事をしているそうだから、1 9 8 0 年生まれの長男ブランドンが映画監督になったのは、ある意味当然・・・。

パンフレットにある柳下毅一郎氏（映画評論家）の「二人のクローネンバーグ」によると、父親のデイヴィッドも「感染」をテーマにしているから、奇妙な感染マニアたちについての話である本作が、いかにも「クローネンバーグ的」な映画だと思えるのは当然らしい。S A R S（サーズ）や鳥インフルエンザ以来「感染」という言葉が現実味と深刻味を増してきている中、妻夫木聡が主演した『感染列島』（0 8 年）（『シネマルーム 2 2 』未掲載）はわかりやすい問題提起作だった。それに対して、ハリウッドでは『バイオハザード』シリーズをはじめとする「近未来」の「感染モノ」が大はやりだが、さてカナダ人の新進 2 世監督がおやじの血とテーマを受け継いでつくった「近未来」の「感染モノ」である本作のテイストは？

＜本作の発想は、監督自身の体験から＞

風邪をひけば病院に行って薬をもらったり注射をしてもらうのが普通だが、あなたは病院でワケのわからない、人体実験のような体験をしたことがある？ライアソン大学映画学科の 1 年生だった当時 2 4 歳のブランドン・クローネンバーグ監督は、深刻なインフルエンザにかかった時、抗ウイルス剤をペトリ皿で培養するための完璧な実験材料となっただろう。そして、そのとき彼は、熱にうなされて夢を見ている間に「僕はその病気の肉体への適応力に夢中になった。いったい何が僕の身体に感染しているのか？僕の細胞は誰かほかの人からもらったものなのか？」と考えたそうだ。

本作の主人公シド・マーチ（ケイレブ・ランドリー・ジョーンズ）は、ルーカス・クリニックに勤める若手の注射技師であり、もう一方の主人公は誰もが羨む完璧な美しさを持ったセレブリティであるハンナ・ガイスト（サラ・ガドン）。前述のような体験をしたブランドン監督が描く近未来では、ハンナのようなセレブリティとの究極の結びつきを求めるため、セレブリティから風邪その他のウイルスを高価で買取りたいと願う顧客が大勢いるという世界になっているらしい。ルーカス・クリニックの業務は、風邪などの病気を患ったセレブリティからそんなウイルスを譲り受け、それを顧客に販売すること。そして、シドは顧客が求めるセレブリティのウイルスを顧客の腕に注射する役目を担当しているわけだ。本作は冒頭に、シドがクリニックにやってきた若い男性顧客のエドワード（ダグラス・スミス）に、ルーカス・クリニック最大の売れ筋商品である、ハンナのウイルスを注射するシークエンスが描かれる。私はこれを見ているだけで気持ち悪くなってきたが、さてあなたは・・・？

＜ソフトの抜け道・裏道＝海賊版はいつの時代も・・・＞

有名女優たちとの接点を持ちたいと願う男の願望は、「〇〇さんのサインをもらった」と言っていて喜んでいるうちはかわいいものだが、「〇〇さんの食べ残しを食べたい」とか「〇〇さんの下着が欲しい」とかになると、かなり変質的。さらに本作が描くように、「〇〇さんの風邪のウイルスを自分の身体にも注射して、〇〇さんと一体になりたい」まで進むと、完全に異常！私はハッキリそう思うのだが、そんなテーマが本作のような映画になるし、ルーカス・クリニックでは、専属契約を結んでいるセレブ女優ハンナのウイルスが最大の売れ筋商品だというから恐れ入る。

6 月 7 日・8 日にわたって 2 日間、延べ 8 時間にわたって行われた、米国・オバマ大統領と中国・習近平国家主席との米中首脳会談では「サイバー攻撃」の件も話し合われたそうだが、セレブのウイルスの売買が行われている近未来社会では、そのソフトの保護＝対外流出の防止が、重要なテーマになるはずだ。ところが、現在の中国における海賊版 D V D の横行ぶりを見れば、その対策が難しいことは明らかだし、本作の主人公であるシドが取っている怪しげな行動をみてもそれは明らかだ。

ルーカス・クリニックの社長であるドリアン（ニコラス・キャンベル）から、新たな病気にかかったハンナのウイルス採取の仕事を命じられたシドは胸を高鳴らせながらホテルの一室でその任務を遂行したが、何と彼は販売用に使うべきそのウイルスの一部を自分の腕に注射し始めたからビックリ！このようにシドはルーカス・クリニックの大切な商品を密かに自分用に流用していたばかりか、嚴重なコピーガードや警備の網をかいくぐって、セレブのウイルスをクリニックの外に持ち出し、肉屋の主人であるブローカーのアービットを通して、海賊ウイルスとして闇マーケットに売りさばいていたわけだ。さらに本作後半には、シドの同僚の注射技師であるデレク（レイド・モーガン）もハンナのウイルスを盗み、ルーカス・クリニックのライバル社であるテッサー社の切れ者の女社長ミラ（ウエンディ・クルーソン）に売りさばいていたことが明らかになるから、何ともはや・・・。ソフトの抜け道・裏道＝海賊版は、いつの時代も・・・。

＜この怪演にはビックリだが・・・＞

シド・マーチを演じたケイレブ・ランドリー・ジョーンズは、『X－MEN：ファースト・ジェネレーション』（1 1 年）におけるミュータントのショーン・キャシディ/バンシー役に抜擢されたことで若手注目株の一人になったらしい。しかし私は『X－MEN』シリーズはハル・ペリーが出演した『X－MEN：ファイナル ディシジョン』（0 6 年）しか観ていない（『シネマルーム 1 1 』4 0 4 頁参照）から、ケイレブのことはよく知らない。しかし、きっと『X－MEN：ファースト・ジェネレーション』では元気モリモリのミュータントを演じていたはずのケイレブが、本作では最初から最後まで全編にわたって、ウイルスに侵された病的なシドを「怪演」しているから、それに注目！

本作ではサラ・ガドン演ずるハンナ・ガイストの方は象徴的な役割だから、出番が少ないうえ動きもほとんどない「演技」。しかし、逆にシド・マーチの方はほとんど出ずっぱりだし、再三登場する体温計を口に突っ込んだ姿や、お化けの形相になるシーン（？）など、何でもブランドン監督の要求に応じて「怪演」している。『マシニスト』（0 4 年）（『シネマルーム 7 』3 8 2 頁参照）では、クリスチャン・ペイルが体重を 3 0 k g ダイエットして 3 6 5 日間も眠っていないという主人公を熱演＝怪演したが、本作におけるケイレブの熱演もそれに勝るとも劣らないものだ。もっとも、それが好きかどうかは別問題だが・・・。

＜ハンナは死んだの？すると、そのウイルスの宿主は？＞

私はゾンビ映画もホラー映画も嫌いだから、本作のような「ウイルスもの（？）」も、基本的に嫌い。しかし、私と同年輩で、長年の北新地での飲み友達である Y 氏は下ネタが大得意なうえ、そこからさらに突っ込んだ「悪夢のような話題（？）」が大好きだ。そんな彼だったら、あこがれのセレブ女優ハンナが新たにかかった病気のウイルスを自分の身体に注射できたことに至上の喜びを感じているシドの気持が理解でき、共有できるに違いない。もっとも、シドはその後体調を崩し、幻覚症状に襲われ意識を失ってしまったから大変。ひょっとして、その原因は？意識を回復した後、ハンナが突然死去してしまったことを聞いたシドがそう心配したのは当然だが、そんな展開になるや、ブランドン監督は更にどんどんシドを追いつめていくからそれに注目。

他方、ハンナが死亡した今、シドが唯一人ハンナのウイルスの宿主になったと知った肉屋の主人アービットとアングラ風俗店の経営者レビン（ジェイムズ・ケイド）がシドを利用しようと考えたのは当然だが、ラストに向けてその策謀の展開は？

＜この終盤とクライマックスを、どう理解する？＞

もっとも、中盤の展開からはハンナのどんなウイルスが、シドの体内にどのように入り込んだから、どんな症状が出ているのかはサッパリわからない。さらに、終盤からクライマックスにかけては、シドが同僚の注射技師デレクの不正行為を突き止める一方で、シドはアービットとレビンに拉致監禁されてしまう羽目に。そして、ハンナの巨大なポートレートが飾られた不気味な密室の中で、死んでしまった（？）ハンナと同じウイルスの宿主であるシドがもがき苦しみ死に至るまでの一部始終をビデオカメラで記録するためのモルモットにされてしまったから、大変だ。

本作はそんな展開の中でクライマックスに向けて突っ走っていくが、実はその時点で大量の血を吐き、ほとんど死にかけていたシドが、なぜその後「復活」できたのかはよくわからない。そして、ラストではテッサー社の女社長ミラの下で再び元気に働き始めたシドの姿が登場するが、そんな展開にあなたは納得できる？それとも・・・？本作ラストに見るシドとハンナとの再会（？）や何ともおぞましい「血の儀式」のシーンは、あなたにとってグロテスク？それとも、限りなくエロティック・・・？